ティーチング・ポートフォリオ

眞田 尊光

（記入日：2026 年 2 月 23 日）

1　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

日本文化入門（２）〈１年必修科目２単位〉、日本の美術（１）・（２）〈１年～４年選択必修科目２単位〉、日本の絵画〈２年～４年選択必修科目２単位〉、日本の仏像〈２年～４年選択必修科目２単位〉、文化財の保護と修復（１）・（２）〈２年～４年選択必修科目２単位〉、日本文化専門演習Ⅴ（１）・（２）〈３年選択必修科目２単位〉、文献演習（１）・（２）〈４年必修科目２単位〉、日本美術史（２年～４年選択科目２単位）など。

2　理念（なぜやっているか：教育目標）

日本文化学科において、学生が日本の美術の歴史や特徴を通して文化のありかたや異文化との関係を深く学ぶために、日本美術関連の科目をおもに担当している。また、美術品や有形文化財を学ぶことで、社会生活をより豊かにするための教養を身につけるとともに、他者を尊重し共存して互いに貢献する意識を身につけることを目指している。

3　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

日本美術関連の科目（日本の美術（１）・（２）、日本の絵画、日本の仏像、日本美術史）では、学生が作品や文化財を観察して理解する際に、デジタル画像・映像の利用だけでなく、絵画・彫刻・工芸品の実物や複製品を教室に持ち込み、学生がそれらを直に触れて学べる機会を設けている。また、同様に実物を観察する機会として博物館・美術館や寺社等での見学授業も実施している（今年度は東京国立博物館平常展、同特別展「運慶」、成田山新勝寺を見学）。

さらに、日本の伝統的な画題や意匠を深く理解するため、製品のデザイン案を提出させ、外部業者の協力を得て製品化するというアクティブラーニングも試みている（今年度は日本の美術（１）で「缶ミラー」を作成）。

文化財関連の科目では、地域における文化財の保護の実態を知るために現地でのフィールドワークを行うとともに（今年度は我孫子市杉村楚人冠記念館、取手市内の寺社、利根川の渡し等を見学）、また有形文化財（掛軸・巻子・茶道具等）の取り扱い方や資料の調査方法、情報の整理方法について実物資料を用いて実践的な指導を行った。

4　成果（どうだったか：結果と評価）

日本美術関連の授業では、初回授業内で簡単なアンケートをとり、各授業で取り扱う分野について学生がどの程度の前提知識を持っているか測っているが、最終回での試験やレポートの解答と比較すると、受講した学生の日本美術への理解が確実に深まっていることを読み取れている（エビデンス１）。

3 年生の専門演習や 4 年生の卒業論文においては、学生が自身の研究対象としている作品を博物館・美術館や現地で丹念に観察し、そのうえで独自の意見をまとめていることを確認できた（エビデンス２）。

日本の美術（１）では、日本の伝統的意匠を参考にした学生のデザイン案をもとに、外部業者に委託して「缶ミラー」を作成し、学科内外に頒布した（エビデンス３）。

我孫子市や取手市の文化財見学で学んだことをもとに、文化財の有効的な活用と保存に関するレポートを課し、その内容から現実に即した理解や知識を得ていることを確認できた（エビデンス４）。

また、授業では自身が見学した展覧会や、SNS で話題になっている展覧会を紹介し、授業内容に絡めることで学生の興味関心を刺激し、自主的な学修へと発展させていることをこころがけている。

また昨年度に授業内で作品や文化財を紹介する際に画像よりも動画のほうが教材としての有効性が高いことを発見したので、今年度も動画を教材として使用する機会をできるだけ増やすようにつとめている。

5　今後の目標（これからどうするか）

授業では教室前方のモニター画面を室内の学生全員に見やすくするために席の移動等を促すとともに、状況に応じて画像や映像を各自のデバイスで見られるように teams でのリアルタイム配信を試みてきたが、さらにできるだけ新たに撮影した動画を活用するなどして、より学生が授業に集中して内容を理解できるように工夫をしていきたい。また、学生が授業時間外に美術品や文化財に接する機会として、展覧会や作品の公開情報を積極的に紹介するとともに、授業の学外見学の機会も確保し、学生が楽しみつつ自主的に学修できるようにしていきたい。

6　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

１　今年度に学生が提出した試験答案とレポート（非公開）

２　今年度に学生が提出した卒業論文及び専門演習での発表（非公開）

３　缶ミラー（日本文化学科学生研究室にて公開・配布）

４　今年度に学生が発表したプレゼンテーション（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

学科：日本文化　　　氏名：山名　順子
（記入日：2026 年　2 月　28 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

近代文学概論（選択必修科目 1～2 年前期）、近代文学講義（選択必修科目 1～2 年後期）、日本文学史（古典）（選択必修科目 1～2 年前期）、日本文学史（近現代）（選択必修科目 1～2 年後期）、日本文学と女性（近代）（選択必修科目 2～3 年後期）、日本文化専門演習Ⅲ（近代文学）（選択必修科目 3 年前後期）、日本語と表現(1)（共通教育科目 1～4 年）、国語科教育法Ⅲ,Ⅳ（教職に関する科目 3 年前後期）、江戸のエコ学（共通教育科目 1～4 年）など

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

自らの関心や問題意識に沿って課題を設定し、適切な方法論にもとづいて解決することのできる人材の育成を教育目標とする。

具体的には日本近代文学に関する知識と理解を深めながら個別の作品の解釈を行うことを通じて、日本の言語文化・言語芸術の持つ魅力や価値を理解するとともに、多様な価値観や現代とは異なる文化への関心や視座を深化させ、他者への理解や社会奉仕の意識をもつことを目指している。

また、国語科教育法の授業を通じて、大学での学びを教育の現場で実践し、良識ある情報発信や社会奉仕を志す人材の育成を目指している。

今年度は、江戸のエコ学を担当し、前近代の事象を近代的な視座から再評価・批評することを試みた。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

日本近代文学に関わる授業では、頻回にリアクションペーパーあるいは teams の課題フォームで授業に関する質疑や感想、授業の中で紹介した作品に関するコメントを課し、次回の授業開始時にフィードバックを行った。

日本文化専門演習では、近代文学研究のための工具書や ICT の活用法、方法論など作品理解のための議論や受講生相互の作業を重視し、teams を通じて授業の内外で受講生と積極的に交流を行えるよう工夫した。また、授業内で論文デ

ータベースの利用法に習熟させ、実際の所蔵機関に足を運ぶなど、資料収集および選択・分析の実践に努めた。
本年度担当した「江戸のエコ学」では、SDGs や 3R に結び付けられがちな江戸時代の生活様式を多角的に学ぶことにより、現代社会における「江戸のエコ」の再評価と、摂取には注意と工夫が必要であることを理解できるよう努めた。また、ペアワークの実施により、学生相互による「異なる視点」の獲得を支援した。
教職に関わる授業では、複数教員による授業分担を想定したグループワークを行い、一つの教材の多角的な分析・理解や、受講生による議論・評価の機会をつくるよう工夫した。模擬授業ではオンラインツールや ICT の有効活用に焦点をあてた。模擬授業はすべて録画し、次年度の教育実習時に参考資料とするため、各受講生が自分の授業動画にアクセスすることのできる環境を調えた。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

日本近代文学に関わる授業では、回を重ねるにつれて自覚的かつ多様な作品分析を行える受講生が増加した。(エビデンス１)。
日本文化専門演習の受講生は、文献の選択・収集・分析を通じて各人の興味に従った先行研究のまとめや研究目的の設置、仮説論証にむけた作業を積極的に行った。内容には個人差があるが、5 回の資料収集の中で卒論の方向性を徐々に明らかにするなど各受講生が目標に向けて努力した（エビデンス２)。成果は現在とりまとめており、完成次第外部に投稿の予定である。卒業論文では、作中にあるジェンダー表象を同時代的な視点から分析する姿勢が見られた（エビデンス２)。
教職に関わる授業では、受講生が相互批評の内容を交換することを通して成果の確認と内容の改善を行うことができた。とくに、模擬授業に対する評価は、学生相互の忌憚のない意見を共有するため、学生の許可を得て実名入りの評価シートを公開・共有した。このことから、自らの意見に責任をもちつつ、批評への工夫や配慮を通して、よりよい教師像への意識を深化することができた。同時に、将来現場で必須の〈評価〉活動への自覚の育成への大きな試みとなった（エビデンス３）。

５　今後の目標（これからどうするか）

受講生の能力を伸ばすため、teams を利用した質疑応答やフィードバックの

機会を重視し、依然として低調な事前・事後学修へのサポートを継続したい。
　今年度は授業資料を概ね teams で共有することに成功したため、受講生が「読んでみたい」と感じた作品の共有などを円滑に行うことができた。来年度以降も、著作権法に配慮しつつ、有効な資料共有に努めたい。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）
１．リアクションペーパー（非公開）
２．各受講生の作成した発表用資料、卒業論文（非公開）
３．各受講生による模擬授業評価表（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

日本文化学科　竹内　啓

（記入日：２０２５年９月８日）

1　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

・幼児教育学科

「幼児造形指導法」（後期、３年次、選択必修科目、演習）

「子どもと造形」（前期、３年次、選択必修科目、演習）

「表現」（前期、２年次、必修科目、演習）

「造形研究」（前期、２年次、選択科目、演習）

「卒業研究」（通年、４年生、必修科目、演習）

「卒業研究演習」（通年、４年次、必修科目、演習）

・日本文化学科

「日本文化実技Ⅴ（１）」（前期、１～３年時、選択必修科目、実技）

「日本文化実技Ⅴ（２）」（後期、1～３年次、選択必修科目、実技）

2　理念（なぜやっているか：教育目標）

　学生が、自分の五感で感じたことを大切にし、そこから自ら発想し考え、楽しんで表現や行動がする自信を育てる。その上で保育者として子どもたちが表現を楽しみ成長できる機会を作るなどの環境を整え、援助ができるように導き支える。

3　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

　実際に自分の目で観察する機会を作り、観察したもの、事柄から感じたことに自信を持って表現できるよう、必ず一つは良い点を見つけて褒めそれを伸ばすことができるよう一人一人に合わせて丁寧にアドバイスしていく。

4　成果（どうだったか：結果と評価）

　授業内で一人一人の状況に合わせて指導していくことは手間がかかるが、苦手意識が強い学生が自分の表現に少しずつ自信を持てるようになってきている。成果を求めて既存のものをいわゆる手本として安易に模倣してしまうことが多く、なかなか自ら発想しようとしない学生がまだ多い。また学生によ

って課題をこなすスピードに差があるため、同時に進めていくことが難しい。

5　今後の目標（これからどうするか）

他の学生がどのように発想しているかを知り、互いにアイデアのヒントを与えたり深められるようにして自分の発想に自信を持たせ、やる気を盛り上げる機会を増やす。ただし他の学生の解答ばかりを気にし過ぎないよう注意する。きめ細かい声かけにより、さらに一人一人の学生が感じ、考えていることの良い点を見つけ、アドバイスの仕方を工夫して自分の感性の大切さを理解させる。

6　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

・スケッチブック（F6）

・学生による授業評価アンケート

ティーチング・ポートフォリオ

（記入日：2026 年 1 月 28 日）　　　　　　　　　日本文化学科　田中　聡

1　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

・生徒指導の理論と方法(中･高)（２年　前期　選択必修科目　２単位）
・特別活動の指導法（２年　前期　選択必修科目　２単位）
・学校経営論（学校安全を含む）（３年　前期、後期　選択必修科目　２単位）
・教育実習演習（事前・事後指導）中高（３年　後期　選択必修科目　１単位）
・教育実習演習（事前・事後指導）中（４年　通年　選択必修科目　１単位）
・教職専門演習（２）（３年　前期　選択必修科目　２単位）
・算数科教育法（２－４年　後期　選択必修科目　２単位）
・教職ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ（事前・事後指導）（３－４年　通年　選択必修科目　４単位）
・教育実習演習(中 事前･事後指導)（４年　通年　選択必修科目　１単位）

2　理念（なぜやっているか：教育目標）

・　自ら課題に向き合い、他者と協働しながら主体的に解決策に取り組むことにより、感謝の心と奉仕の精神を育み，自律した人材を育成するため。
・　教職に対する意欲を引き出し、教員に必要な基礎的、基本的な知識・技能を習得し、活用できるようにするため。

3　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

・　事前学修の課題を明確にし、事前に取り組んだものを授業内で共有し、新たな疑問や課題に向き合いながら問題解決型の授業を進めてきた。各学年、領域の目標や学習内容の系統について学習指導要領を基に調べ、単元計画や PP シートを作成し、プレゼンを行った。（算数科教育法）
・　事前学修として模擬授業のための素材づくりや細案、略案、板書計画等の作成を行った。必要により事前学修の個別指導を面談やリモートで行った。模擬授業の様子をビデオ撮影し、事後学修での振り返りを行った。毎回、児童役となった学生全員で評価票を記入し、模擬授業者に提出した。（算数科教育法）
・　実際の学校現場の様子や先輩の実習の様子をビデオ視聴できるようにした。教育実習での具体的な課題を提示し、デスカッションする場面を設定した。毎

時間のリアクションペーパーを事後学修の中に盛り込んだ。(教育実習演習)
- 実際の教採に合わせた模擬授業や各自が収集した時事問題のプレゼン、集団討議を授業の導入で実施した。事前学修として、各自治体の教採の傾向や過去問題の傾向を調査し、ディスカッションやプレゼンを行った。(教職専門演習)
- 経営の基本について学校現場の課題を例にしながら、どう取り組むべきかを思考し、グループ内で考えを深めた。(学校経営論)

4　成果（どうだったか：結果と評価）
- 少人数（20 名程度）の授業では、teams の活用により、授業中の個別の意見や質問を取り上げやすくなった。個別対応が取れることで学生の意欲が高まり、主体的な参加型の授業となった。
- 事前学修での課題⇒授業内でのプレゼン、ディスカッションといった流れが、1 時間 1 時間の授業のねらいを学生が理解し、振り返るのに有効だった。
- 学校現場の具体的な指導場面のビデオ視聴や外部講師の導入は、学生の課題意識を明確にし、教職に向かう意欲の向上に大きく寄与した。
- 1 時間の授業課題を明確にし、問題解決型にすることで、学生に授業の意図をわかりやすく伝えることができ、学生も積極的に授業に参加できた。特に、事前学修が充実してきた。
- 振り返りシートや授業評価等を活用することで、学生の「わかった」「できた」というメタ認知を創り出せた。教職に関する具体的な知識技能を習得しているという実感を持たせることができた。
- どの授業も授業評価の各項目で「そう思う」が多かった。特に教育実習関係の科目は、学生にとっても主体的に学ぶことができたようである。

5　今後の目標（これからどうするか）
- 卒業後教師になるという目標がはっきりしている学生以外でも、人としてどう課題に取り組むべきかを考えられるように、それぞれの「学び」の目標をさらに明確にし、取り組むべき学習課題の設定を適切に行っていきたい。
- ICT 活用が必須となるので、現在学校現場で活用されている実物投影機や大型テレビ、プロジェクター等に加え、タブレット端末の活用も模擬授業の中で取り上げていきたい。実習報告の中でタブレット活用の実際について発表させた。(授業でどう活用したか)

・　ワード、エクセル、ＰＰ等のアプリの活用を積極的に行い、作成スキルの向上を目指すとともに、プレゼンスキルについても授業の中で触れながら向上を図っていきたい。
・　教員採用選考に対する取り組みを組織的に行うことができたが、教職専門演習等の授業との関連や教員同士の横のつながりを強くしていきたい。

6　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

①　振り返りシート、板書計画、単元の指導計画、学習指導案、レポート等
②　「彼方」（校長通信・指導室長だより）、テキスト（シラバス記載）
③　外部講師、学校現場での実践ビデオ、実習生の精錬授業のビデオ

ティーチング・ポートフォリオ

伊藤 純

（記入日：2026 年 2 月 16 日）

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

日本文化学科専門科目では「日本の伝統芸能（1）（2）」「日本の民話・神話（1）（2）」「日本の宗教と思想（1）（2）」「日本風俗史」「プレゼミナール」「日本文化専門演習Ⅵ（1）（2）」「文献演習（1）（2）」、共通教育科目では「民俗学」「文化人類学」を担当している。大学院では「文化人類学特論Ⅰ（1）・Ⅱ（1）」を担当している。

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

学生の関心や問題意識を尊重しながら、学生自ら課題を設定し、課題に対する適切な方法論を用いることができる人材を育成することが教育目標である。特に文化を取り扱う領域のため、学生が民俗学・文化人類学の知識、方法、視座を学ぶことにより、自文化および異文化、さらに自己および他者に対する理解を深めることを目指している。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

講義科目では、初学者でも内容を理解しやすい授業設計を心がけ、テキストに加えて写真や動画を用いたスライド資料を活用した。とくに、視覚的な情報を多く取り入れることで、抽象的な文化的事象を具体的に把握できるように努めた。また、授業後にはリアクションペーパーを課し、学生の疑問点や興味を把握したうえで、次回授業で丁寧に回答・補足説明を行うことで学習の連続性を確保した。

「日本の伝統芸能」では、授業内容と関連する専門的情報（「国指定文化財等データベース」「e 国宝」等）へ学生が授業外でも容易にアクセスできるよう、配布資料に QR コードを掲載した。これにより学生自身が一次情報や映像資料を参照し、主体的に理解を深められる環境を整えた。

「民俗学」「文化人類学」の授業はオンデマンド型授業であった。対面とは異なり、意思疎通が困難な点もあったが、Teams を活用し、課題の返却でフィードバック・コミュニケーションをとった。

演習科目においては、図書館のグループ学習室を活用したライブラリワークや博物館見学を実施し、学生が必要な資料・文献を自ら探し、研究の基礎的スキルを身につけられるよう指導した。さらに、自主ゼミ形式で民俗調査実習を企画し、事前準備から聞き取り調査、資料整理、報告書作成まで、民俗学の調査手法を一連の流れで経験できる機会を提供した。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

講義科目では、テキストだけでは理解が難しい用語や抽象的な概念に対して、写真・動画を併用したことで、学生が自身の経験と結びつけながら内容を把握できていることがリア

クションペーパーから確認できた（エビデンス１）。視覚的資料の活用は、初学者の理解促進に有効であったと評価できる。また、授業内外で視聴可能な動画資料を取り入れた結果、日本文化への興味・関心が高まり、学生が自主的に関連情報を調べる姿勢が見られた（エビデンス１）。QR コードの提示により一次情報へのアクセスが容易になったことも、学習意欲の向上に寄与した。

日本文化専門演習（１）（２）においては、学生が各自の発表に必要な文献・資料を主体的に収集できるようになり、授業内での討議も活発化した（エビデンス２）。調べる・まとめる・議論するという学術的基礎スキルの定着が確認できた。

また、自主ゼミとして実施した民俗調査実習では、調査資料の整理から文章化、最終的な報告書作成に至るまでの一連のプロセスを体験することで、学生の調査能力が着実に向上した。さらに、完成した報告書を調査地へ還元したことにより、学生が自らの学びが地域社会に貢献し得ることを実感する機会ともなった（エビデンス１）。さらに、データの収集・整理・文章化のプロセスで培った調査経験や報告書作成能力は就職活動において自己 PR として活用されており、社会人基礎力の向上にもつながっていることが確認できた。

2025 年度の反省点として、学生の生成 AI の利用について説明が不足していた点が挙げられる。原因は①生成 AI が加速度的に普及したこと②AI の精度が向上したこと③シラバス作成時期および年度当初にはその状況が予測できなかったことが挙げられる。実際に AI に高く依存している文章が見られ、授業期間終盤になってから AI に対する考え方を示さざるを得ない状況になった。課題提出の方法や評価割合の見直しが必要と感じている。

５ 今後の目標（これからどうするか）

今後は、学生の主体的な学修を進めるために、事前・事後学修の充実を図る。まず、授業内容の理解を深める基礎文献リストを事前に提示し、読解のポイントや参照すべき箇所についての具体的なアドバイスを行う。また、学修成果を確認する機会を増やすため、レポート課題や簡易な問いを通して学生が理解をアウトプットできるようにする。

さらに、引き続き授業支援ツールとして Teams や Forms を積極的に活用し、教室内だけでなく、事前・事後学修においても情報共有や課題提出が円滑に行えるようにする。これにより、学生が時間や場所にとらわれず学修を継続できる仕組みづくりを進めていく。

こうした取り組みを通して、授業内容と学修プロセスの双方を継続的に改善し、その成果を適切に検証しながら、より質の高い教育実践を目指していく。

エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

１ リアクションペーパー（非公開）、レポート（非公開）

２ 授業配布物 大学配布のアカウントの OneDrive に保管（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

日本文化学科　川田　明彦

（記入日：2025 年 9 月 28 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

・情報リテラシー＜日本文化学科・心理学科対象 共通科目必須２単位＞
・情報処理基礎／情報処理（1）　＜日本文化学科・心理学科対象 共通科目必須２単位＞
・情報処理（3）〈共通科目選択２単位、我孫子〉
・情報処理（4）〈共通科目選択２単位、我孫子〉
・情報処理（5）〈共通科目選択２単位、我孫子、目白〉
・映像文化論〈共通科目選択２単位、我孫子、目白〉

２　教育理念（なぜやっているか：教育目標）

情報化社会において ICT スキルは、あらゆる分野の基盤となる。正しい情報処理教育を行うことで、大学生活ばかりでなく、社会でも役立つ ICT スキルの習得を目標とする。勉強や仕事の生産性を高め、問題解決能力の向上に役立つ知識と技術の習得を通じ、自己実現が可能となる教育を目指す。

情報リテラシー教育では、「理論」を通じて情報の批判的思考や、多様な視点を尊重する態度を身に着け、情報倫理と責任ある行動ができることを目標とし、「実技」を通じて主体的な情報活用能力を育成することを目標とする。変化する情報環境に柔軟に対応し、学び続ける力を育成することを目指す。

映像文化論では、「理論」の学習からメディアリテラシーの向上を目指し、「実技」の学習を通じて、表現力と想像力の育成を目標とする。多彩な映像芸術に触れることで、文化理解と多様性の尊重、豊かな社会生活の創造を目指すものである。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

「情報処理基礎／情報処理（1）」

中学や高校でも情報処理を学ぶ機会も増え、大学入学時に、office ソフトに慣れている学生がいる一方、コンピューターの操作を苦手とする学生も多数みうけられる。全ての学生に対応するために、以下の工夫を遂行している。

①　オリジナル配布資料の作成

市販の書籍では不十分なため、習得してもらいたい知識と技術を網羅したオリジナルテキスト（約 100 頁）を作成し、講義資料として配布している。

②　ホームページの作成

パソコン操作は、動画での解説が一番わかりやすいため、必要な技術をすべて動画として作成し、ホームページに掲載している。

③　学習環境の構築

いつでもどこでも学べるように、上記の動画を一つ一つにＱＲコードを作成し、配布資料に付している。学生はスマホを活用して、いつでも学習できる環境を整えている。

④　反転学習の推奨および、苦手な学生や欠席者への配慮

初回の講義で、①で紹介したホームページを紹介し、学習理解の向上につながるように、予習を推奨している。講義で理解出来なかった学生や、欠席した学生にも、動画を視聴することで、授業に遅れることなく受講できる環境を構築し、繰り返し学習することを可能としている。

⑤ 質問環境の構築

授業中の挙手、リアクションペーパー、オフィスアワーの活用に加え、teams のチャットからの随時質問できる体制を整えている。

「情報リテラシー」

① 毎回の講義において、「前半」を理論、「後半」を実技として、講義で学んだ理論を、パソコン操作で実践することで、より深い理解と知識の定着。パソコン実技の習得を目指している。

② 質問環境の構築

授業中の挙手、リアクションペーパー、オフィスアワーの活用に加え、teams のチャットからの随時 問の受付の対応をとっている。

「映像文化論」

① 全て、オリジナルの資料を作成して配布。

② 15 回の講義の前半を、「映像と社会」として、映像の歴史を過去・現在・未来にいたるまで、映像技術をその時代の社会とともに学習し、後半は「映像の文法」として、学生が自ら考えたアイデアで、映像作品のシナリオを構築することで、映像の文法を理解し、多彩な表現力を身に着けることを目標としている。

講義全体を通じて、映像を社会的・理論的に分析し表現する力を要請する工夫をしている。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

「情報処理基礎／情報処理（1)」

① もともとパソコンの得意な学生は、より洗練され。苦手な学生は、苦手意識が薄れたと講義後のアンケートで評価をもらう。

② オリジナル冊子を、講義後も継続して使用している学生が多数見受けられる。

「情報リテラシー」

クラウドの活用を全くしなかった学生の活用率が増えた。

「映像文化論」

映像に興味を持ち、映像作品を楽しむ学生が増えた。

５　今後の目標（これからどうするか）

質問しやすい環境を構築していても、消極的で分からないまま質問を出来ない学生も存在するので、なるべく、声掛けをして、現状を確認しつつ積極的な声掛けを心掛けたい。

「情報処理」においての最大の目標は、パソコンが苦手な人の苦手意識が薄れ、少しでも楽しく、好きになってもらうことである。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1　授業評価アンケート（非公開）

2　リアクションペーパー、レポート（非公開）

3　オリジナル配布資料、ホームページ

ティーチング・ポートフォリオ

日本文化学科　張　明

（記入日：2026 年 2 月 25 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

日本語学（1）（2）（音声言語を含む）、日本語の歴史（1）（2）、文章表現法、日本語教授法（初級編）（中上級編）、日本語教育演習（日本語教育実習を含む）、日本文化専門演習Ⅳ（1）（2）（日本語学）、文献演習（1）（2）、基礎ゼミナール、情報リテラシー

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

身近にある日本語を意識的に捉えて分析し、学問が身近なところにあることを理解する。また、知識や専門用語をただ暗記するのではなく、それらを国語教育や日本語教育の現場にどのように応用できるかを考える。

講義や教科書の内容をそのまま受け入れるのではなく、本当にそうなのかと問い直しながら疑問点を発見する。さらに、その疑問をどのように解決するかを、個人またはグループで考え、主体的に問題解決する力を養う。

授業や共同作業を通してさまざまな意見を取り入れ、他者の意見に耳を傾ける姿勢や、自分の考えを人に説明する力を磨く。そして、「考える」「わかりやすく伝える」「実践する」「振り返る」「評価する」力を養うことを目指す。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

・「日本語学」「日本語の歴史」「日本語教授法」などの専門講義科目

配布資料とパワーポイントを用いて授業を進める。配布資料は穴埋め形式とし、重要なポイントを意識できるように作成している。パワーポイントは授業後の復習に活用できるよう、Teams にアップロードして公開している。配布資料にはクイズ形式の問題を多く取り入れ、知識を教員から一方的に与えるのではなく、学生自身が考えて導き出すことを重視している。また、毎回の授業でリアクションペーパーを書いてもらい、授業の感想や疑問点、模範解答のない問いに対する意見などを自由に記してもらう。授業後に内容を確認し、重要な点については次回の授業で全体に共有する。さらに、授業後には小課題を課す。

授業内容を理解すれば解ける練習問題のほか、関連文献を調べて内容をまとめる課題などである。提出された課題には必ずコメントを付して返却し、次回の授業でもフィードバックを行う。

・「日本語教授法」「日本語教育演習」などの日本語教育の専門科目

座学の時間を最小限に抑え、できる限り応用や実践に多くの時間を充てるようにしている。特に模擬授業は1〜2回経験してもらう。「日本語教授法」では個人で、「日本語教育演習」では受講生同士で教材分析を行い、授業設計を進めてもらう。授業内では模擬授業を実施し、その後、自己評価やグループでの評価を行い、よくできたところや反省点を挙げながらフィードバックを行う。また、今年度も学外授業として日本語教育の現場の授業を見学し、実際の教育実践に触れることで、より深い学びにつなげることを目指している。

・「文章表現法」

主にグループワークを取り入れ、文章表現力を指導している。タスクを設定し、グループで取り組むことで多様な意見を取り入れ、客観的な文章が書けるよう指導している。さらに、話し合った結果を発表する機会を設けることで、プレゼンテーション能力の向上も図っている。

・「日本文化専門演習Ⅳ」

受講生の発表と質疑応答を中心に授業を進める。前期は主に日本語学の専門書や学術論文を講読し、日本語学における記述的研究の方法について学ぶ。後期は各自が課題を設定し、日本語について調査・分析を行い、その結果を報告する。これらの活動を通して、「文章を読む」「要点をまとめる」「発表する」「質問を考える」「意見を述べる」「レポートを書く」といった力を総合的に身につけることを目指している。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

・「日本語学」「日本語の歴史」「日本語教授法」などの専門講義科目

学生は基本的な知識を体系的に理解し、それを国語教育や日本語教育の現場にどのように応用できるかについて考えることができた。この点は、提出された課題や期末レポートの内容から確認できた。また、普段何気なく使っている母語を客観的に分析し、その変化について深く考える姿勢も見られた。これは学生のリアクションペーパーの記述からうかがえた。

・「日本語教授法」「日本語教育演習」などの日本語教育の専門科目

日本語を教えるうえで必要となる知識を習得するとともに、グループでの教材分析・教材作成、教案の作成・修正、模擬授業などを通して実践力を身につけることができた。このことは、学生が提出した教案や作成した教材、発表資料などから確認できた。

・「文章表現法」

グループワークを通して多様な意見を取り入れ、客観的な文章を書く力が身についた。このことは、グループで提出した作成物や課題の内容から確認できた。

・「日本文化専門演習Ⅳ」

専門書や論文の講読・要約の方法、発表用レジュメやパワーポイントをわかりやすく作成する方法、聞き手に伝わりやすい発表の工夫、質問や疑問点の見つけ方、質問に対して自分の意見をわかりやすく伝える方法、さらに日本語の用例を収集して分析・考察する方法などを一通り体験・実践し、おおむね理解することができた。このことは、学生が作成した発表資料や提出したレポートから確認できた。

５　今後の目標（これからどうするか）

今年度は、授業の冒頭に前回の復習や当日の要点を説明する時間を設けた。前回のリアクションペーパーや小課題についてフィードバックする時間もあって、その結果、新しい知識を解説する時間がやや短くなり、授業が予定どおりに終わらないこともあった。今後は、これらの時間配分をどのように調整するかが課題である。

昨年度の授業評価アンケートで高い評価を得た科目や、理解に問題が見られなかったテーマについても、今年度は課題が見られる部分があった。授業形式や内容が同じであっても、履修者が異なれば理解度や効果も変わるため、毎年度の履修者の特性を踏まえて授業展開を検討する必要がある。

また、授業内容の理解についていくことが難しい履修者も一部に見られた。授業後に個別相談や指導の時間を設けるなど、学習を支援する体制を整えることも今後の課題である。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

①リアクションペーパー（非公開）

②教案・教材、本の POP、発表レジュメ・パワーポイントなどの作成物

③課題、レポート、ワークシートなどの提出物

④2025 年度前期・後期授業評価アンケート

ティーチング・ポートフォリオ

宮内　理伽

（記入日：2026 年 2 月 27 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

基礎ゼミナール〈１年次必修科目２単位〉、プレゼミナール〈２年次必修科目２単位〉、日本文化専門演習Ⅱ（日本古典文学）〈３年次選択必修科目２単位〉、文献演習〈４年次必修科目２単位〉、日本文化入門〈１年次必修科目２単位〉、古典文学概論〈１～２年次必修科目２単位〉、くずし字を読む〈１～４年次選択必修科目２単位〉、日本文学と女性（古典）〈２～３年次選択必修科目２単位〉、王朝の文化と文学〈２～３年次選択必修科目２単位〉、古典文学講義〈１～２年次選択必修科目２単位〉、文学〈共通教育科目２単位〉、キャリア・プランニングⅣ(1)(2)〈３年次選択科目２単位〉

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

日本古典文学に対する基礎的な知識や古典の本文を読解する能力を培い、テクストを多角的に読解する能力を身につける。その上で、自らの問題意識を持って文学作品に向き合い、自らの問いに関して論理的・実証的に考え、他者に伝える能力を身につける。

併せて、演習での発表や講義のレポート課題の提出を通して、社会人として求められるリサーチ能力・ライティング能力・プレゼンテーション能力などの基礎的な力を身につけていく。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

日本古典文学関連の講義では、講義の要点をまとめた power point とともに、その回で取り扱う古典文学作品の本文と現代語訳を配布し、古典の原文に触れる機会を設けている。講義を受講している学生の中には、古典に苦手意識を持っている学生も少なくないが、現代語訳も併せて配布することで理解を促しつつ、古典文法や修辞法、歴史的な背景などを適宜解説することによって、古典の本文の基礎的な読解力が身につくよう心掛けている。また、講義では必ず各回取り扱う作品の文学史的な意義にも触れ、本文を読みつつ、俯瞰的な視点からもその作品を考えるように促している。こうした工夫は、受講者の中に国語科教員を志望する学生が含まれていることを念頭に入れたものであり、全体として日本古典文学に対する基礎的な素養を身につけられるよう構成している。

また、絵画・図典・写真資料を活用することで、当時の風俗・文化への理解を助けている。特に、１年生の必修科目「日本文化入門」「基礎ゼミナール」では、映像資料（例えば令和６年放映大河ドラマ「光る君へ」など）も積極的に活用し、日本の古典文学に描かれる時代のイメージを持ち、また、楽しんで学べるよう工夫している。

１～４年生の演習では、まず初めに複数回のガイダンスを行い、図書館・学生研究室の利用方法、基本的な参考文献、参考資料の扱い方・引用方法などを解説し、受講者全員が基礎的なリサーチ能力を身につけているか確認している。その上で、学生本人が自らの問題意識を持ち、その問題意識に沿って論理的に考える力を持てるよう、個別にフィードバ

ックをしながら指導している。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

担当する全ての講義において、毎回 Ｂ６サイズの大きめのコメントペーパーを配り、講義を受けて何を考えたか、疑問に思ったことなどを記入してもらい、受講者の講義に対する理解度や関心などをはかっている。場合に応じて、次の回で受講者の感想や疑問を講義の中で取り上げ、全体に対してフィードバックを行っている。こうしたやり取りを毎回行うことによって、受講している学生それぞれが、自分が講義の中で興味を持ったこと、疑問に思ったことを意識し、それについて調べ、考えたことをレポート課題として提出してもらっている。

自らの問題意識に沿った研究の成果としてのレポート課題が見られる一方で、現在直面しているのが生成 AI を利用する学生も中には存在するという問題である。古典文学を取り扱う講義が多いという特質上、本年度は最終課題としてレポート提出を主として課したが、受講者の中には生成 AI を利用してレポート課題を提出する学生もおり、「２　理念」で掲げた、自らの問題意識を持って文学作品に向き合い、自らの問いに関して論理的・実証的に考える力を育むという教育目標に反する結果となっている。今後は、レポート課題の設定をより複雑するなどの工夫をし、生成 AI に頼ることのない深い思考力の涵養を目指していきたい。

演習では、学生発表とともに古典の本文を音読し、読んで感じたことを受講者全員で共有する読書会を組み合わせることによって、古典の本文に直に向き合い、ほかのゼミ生と意見を交換する場を設けた。読書会では、ここが面白いや、ここが気になったなど、受講者がそれぞれささいなことでも発言しやすい雰囲気を作れるよう心掛けている。複数回にわたるガイダンスに加えて、読書会と学生発表を組み合わせることで、回を重ねるごとに、学生の発表やそれに対するコメントも練磨され、ゼミ全体として、対象とした日本古典文学作品に対する深い読みが生まれていったように思う。

キャリア関連の講義では、エントリーシートを添削する教員の一人として参加した。最初はエントリーシートをうまく書くことができなかった学生も、何回かやり取りをするうちに、自分がやりたいこと、自分の強み、志望動機などを自らのことばで表現できるようになっていった。こうした添削指導は単なる文章の添削ではなく、学生本人の進路に関わる重要な指導でもある。１年を通し、学生に対する丁寧なヒアリング（どういった職種を考えているか、学生時代力を入れてきたことは何か…など）を行った上で、学生をそれを自分のことばで表現できるように指導を行った。

５　今後の目標（これからどうするか）

古典文学関連の講義を受講している学生の中には、初学者から、古典に苦手意識を持つ学生、国語科教員を目指し本格的に取り組んでいる学生など、さまざまな学生が含まれている。初学者でも取り組みやすいよう、視聴覚資料や現代語訳を今後も取り入れつつ、さ

らに発展的・応用的な内容も講義の中に取り入れていきたい。

まず第一に取り組みたいのが、古典文法の段階的・体系的な学習である。本年度、国語科教員を志望する学生の中には、古典文法に苦手意識を持つ学生が意外と多いということを肌で感じた。しかし、古典文法を体系的に理解していなければ、古典文学作品を正確に理解することはできない。古典文法がいかに古典本文の読解に必要なのか意識させた上で、古典文法をより体系的に講義の中に組み入れ、国語科教員になるための基礎的な力も講義を通して身につけられるよう取り組みたい。

また併せて取り組みたいのが、自分で深く考えなければ答えは見えてこない課題の設定である。本年度、生成 AI を用いてレポート課題に取り組む学生の存在については先述しているが、安易な生成 AI の利用は、学生本人の思考力や文章を自力で書く力の養成を阻みかねない。レポート課題は、自分で考え調べたことを、自分のことばでまとめていく力を身につけてもらうために課している。今後は、レポート課題の課題を複雑なものに設定し、学生本人の考える力を育み、レポート課題執筆を通して、基本的なライティング能力を養ってもらいたいと考えている。

キャリア関連講義では、学生本人の進路に関わる重要な指導であることを、１年間にわたる添削指導を通し実感した。今後も、丁寧なヒアリングに基づく添削指導を心掛けていきたい。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

・今年度に学生が提出した各講義のコメントシート（非公開）
・今年度に学生が提出したレポート・試験の内容（非公開）
・今年度に行った演習における学生の発表資料（非公開）
・授業アンケートの結果